

日本古典全書
風土記
下

監修

新村出
山岸德平

高木市之助
小島吉雄

久松潜一

風土記

下

久松潜一校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

久松潜一（ひさまつせんいち）

明治二十七年愛知縣生。大正八年
東京大學國文學科卒業。東京大學
教授、慶應大學教授をへて現在東
京大學名譽教授。日本學士院會員。
主著―日本文學評論史、日本歌論
史の研究、萬葉集の新研究、萬葉
集考説、上代日本文學の研究等。

日本古典全書

「風土記」下 久松潜一校註

昭和三十五年十月三十日初版發行

昭和四十一年四月十日第二版發行

印刷所 圖書印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉區砂津・名古屋市

中區廣小路）

定價 五〇〇圓

目次

解説

一、風土記の内容と風土	三
二、風土記の文學性	五
三、出雲風土記	九
四、風土記逸文	一三
五、風土記の研究史	一四

〔附篇〕

出雲國風土記の底本について	一七
風土記逸文一覽表	二三

凡例	二四
----	----

本文	四三
----	----

風土記（下）

出雲國風土記

凡例	書下し文・原文	四四
總記		四七
意宇郡		四八
嶋根郡		五五
秋鹿郡		一〇六
楯縫郡		一一九
出雲郡		一三〇
神門郡		一五四
飯石郡		一六八
仁多郡		一七九
大原郡		一八九
道度		二〇一

風土記逸文

凡例		二一〇
山城國	書下し文・原文	二二一
賀茂の社	書下し文・原文	二二二
伊奈利の社	書下し文・原文	二二五

三井の社	二三	鳥部の里	二六
木幡の社	二三	宇治	二七
水渡の社	二四	桂の里	二七
伊勢田の社	二四	賀茂の乗馬	二八
荒海の社	二四	宇治の橋姫	二九
南郡の社	二五	宇治の瀧津屋	二九
可勢の社	二五		
大和國	二九		
三都の嫁	三〇	大口の眞神が原	三〇
三山	三〇	御杖の神宮	三一
香山	三〇		
攝津國	三一		
住吉	三一	汝賣の神の社	三九
夢野	三三	八十島	三九
歌垣山	三四	下樋山	三九
有馬の湯泉・久牟知川	三四	御前の濱・武庫	四〇
土蛛	三五	水無瀬	四一
稻倉山	三六	鑑稻の村	四一
比賣島の松原	三六	堀江の一橋	四二
美奴賣の松原	三七	高津	四三

御魚家……………三三

伊賀國

伊賀の國號(一)……………三三
伊賀の國號(二)……………三四

唐琴……………三五

伊勢國

伊勢の國號……………三六
伊勢の國號……………三七

的形の浦……………三八
度會の郡……………三九
瀧原の神宮……………四〇
伊勢の國號の一説……………四〇
安佐賀の社……………四一

宇治の郷……………四二
度會・佐古久志呂……………四三
八尋の機殿・多氣の郡……………四四
五十鈴……………四五
服織の社……………四六
麻績の郷……………四七

志摩國……………四八

吉津の島……………四九

尾張國……………五〇

熱田の社……………五一
吾縵の郷……………五二
川嶋の社……………五三
福興寺……………五四
尾張の國號……………五五
登々川……………五六

葉栗の尼寺……………五七
藤木田……………五八
宇夫須那の社……………五九
張田の邑……………六〇
大吳の里……………六一
星石……………六二

徳々志	二五〇		
參河國	二五三		
矢作河	二五三		
駿河國	二五三		
三保の松原	二五三	てこの呼吸	二五四
富士の雪	二五四	駿河の國號	二五六
伊豆國	二五六		二五六
溫泉	二五六	造船	二五八
興野の神獵	二五七		
甲斐國	二五九		
菊花山	二五九		
相摸國	二六〇	足輕の山	二六〇
伊曾布利	二六〇		
下總・上總國	二六〇		
下總・上總の國號	二六〇		
常陸國	二六一		
信太の郡	二六二	枳波都久の岡	二六三
大神の驛家	二六三	桁藻山	二六四
天皇の稱號	二六三	かひや	二六四
郡をくといふこと	二六三	尾長鳥	二六四

比佐頭	二五五	賀蘇理の岡	二六六
賀久賀鳥	二五五	續麻	二六六
久慈理の岳	二六六	沼尾の池	二六七
近江國	二六八		
伊香の大江	二六八	八張口の神の社	二七〇
竹生島	二七〇	細浪の國	二七一
美濃國	二七一		
金山彦の神	二七一		
飛驒國	二七二		
飛驒の國號	二七二		
信濃國	二七三		
ははき木	二七三		
陸奥國	二七三		
八槻の郷	二七三	淺香の沼	二七六
飯豊山	二七五		
若狹國	二七七		
若狹の國號	二七七		
越前國	二七七		
氣比の神宮	二七七		
越後國	二七八		

丹後國	八坂丹	二七六	八掬脛	二七六	二七六
奈具の社	二七九	二八一	浦の嶼子	二八四	二八八
天の椅立	二八三	二八三			二九一
因幡國					
武内宿禰	二九二	二九二	白兔	二九三	二九六
稻葉の國	二九二	二九二			
伯耆國					
栗嶋	二九四	二九五	伯耆の國號	二九五	二九六
震動之時	二九五	二九五			
石見國					
人丸	二九六	二九七			二九六
播磨國					二九七
速鳥	二九七	二九八	八十橋	二九八	三〇〇
爾保都比賣命	二九八	二九九	藤江の浦	三〇〇	三〇〇
美作國					三〇〇
美作の國守	三〇〇	三〇一	勝間田の池	三〇一	三〇一
備前國					三〇一
牛窓	三〇一	三〇一			三〇一
備中國					三〇一

適磨の郷	三〇一	宮瀬川	三〇三
新造の御宅	三〇一		
備後國	三〇二		
蘇民將來	三〇三		
紀伊國	三〇四		
手束弓	三〇六	アサモヨヒ	三〇六
淡路國	三〇七		
鹿子の湊	三〇七		
阿波國	三〇八		
奈佐の浦	三〇八	中の湖	三〇九
勝間の井	三〇八	アマノモト山	三〇九
天皇の稱號	三〇八	湖の字	三一〇
讃岐國	三一〇		
阿波島	三一〇		
伊豫國	三一〇		
大山積の神・御嶋	三一一	伊社邇波の岡	三一一
天山	三一一	美枳多頭爾(齊明天皇御歌)	三一二
熊野の峰	三一二	息長足日女の御歌	三一二
溫泉	三一二	二木	三一二
土佐國	三一二		

肥前國……………三二〇
杵島（筑紫國）……………三三〇
岐搖の岑（筑紫國）……………三三一
三三一

與止姫の神	三三三	三三三
肥後國	三三三	三三三
肥後の國號	三四二	三四二
關宗の岳(筑紫國)	三四五	三四五
爾陪の魚	三四六	三四七
日向國	三四九	三四九
高日の村	三四九	三四九
智錦の郷	三四九	三五〇
日向の國號	三五一	三五一
大隅國	三五三	三五三
串卜の郷	三五三	三五三
必志の里	三五三	三五三
薩摩國	三五四	三五四
竹屋の村	三五四	三五四
壹岐國	三五五	三五五
鯨伏の郷	三五五	三五五
所屬不明	三五六	三五六
御津柏(筑紫國)	三五六	三五六
木綿(筑紫國)	三五七	三五七
エ	三五七	三五七
グ	三五七	三五七
水嶋(筑紫國)	三四七	三四七
阿蘇の郡	三四八	三四八
韓穂生の村	三五一	三五一
吐濃の峯	三五二	三五二
耆小神	三五四	三五四
釀酒	三五四	三五四
朴樹	三五六	三五六
條	三五七	三五七
アハデノ森	三五七	三五七

風
土
記
下

久
松
潜
一

解 說

一 風土記の内容と風土

先づ風土記の性格を知るために、その内容にわたつて解説を行ふ。

現存してゐる風土記の中で、出雲風土記は國史の上にも重要な地域であり、出雲の神々の活躍された點で出雲風土記は國史にもつながる點が多い。常陸も東國において神代以來、重要な地域であり、播磨も大和に近く、九州や出雲からの交通路として重要な地域である。肥前、豊後にしても北九州の地域として太宰府に近く、重要な意義を有してゐる。恐らく現存する風土記は當時成立した諸國風土記の中で内容においてもすぐれた風土記として重んじられたと思はれる。これ等の諸國の風土記が現存してゐるのも決して偶然であつたとは思はれない。それ故にこれ等の風土記が自然地理的のみならず、歴史との關聯が著しいことを思はねばならない。

即ち出雲風土記は出雲の神々による出雲地方の統治といふ事が種々の點から見られるのであり、大國主

神に關する傳承も多く見られる。また常陸風土記には日本武尊による東國平定といふ歴史の大いなる事業と深い關聯が見られるのであり、播磨においても大國主神や少彥名命に關する傳承が見られる。更に肥前風土記や豐後風土記も景行天皇や日本武尊の御西征に關する傳承が見られるのであつて、ここに現存五風土記において自然地理とともに國史とのつながりが認められる。かういふ點で風土記における古典性を扱ふ場合は歴史と地理との關聯といふ事が大きな課題となるのであつて、それぞれの場所において如何に歴史が築かれたかといふ事が知られる。ただそれは都と異なつて地方性を主としてゐる點に、都を中心とする國史とは異なつてをり、そこにはまた風土記が古老の舊聞遺事を主とする所以でもある。とにかく風土記を歴史における場所として扱ふことは、すでに肥後和男氏が風土記抄において試みられた所であるが、重要な一面をなしてゐるといへる。

次に風土の上から見ると、續日本紀にもある如く、土地の沃瘠や山川原野の状態、及びその土地の動植物その他の產物等は重要な點であるが、またその土地の位置や地形や氣候等も重要な點である。さうして現存してゐる五風土記はいづれも大和や山城や信濃等の山國と違つて海岸の國々であるのは、偶然のことともいへるが注意される。さうして同じ海邊の國々でも太平洋岸もあり、日本海沿岸もあり、瀬戸内海にそつた土地、筑紫の海岸もあり、それぞれ風土性を異にしてゐるが、現存五風土記を見ると、常陸風土記は太平洋岸であり、出雲風土記は日本海岸であり、播磨風土記は瀬戸内海岸である。また肥前・豐後風土